

虹の架橋

今月の題字

小澤笑子 (えみこ) さん

(桐生市新里町)

一級着付け技能士、一級和装士の小澤笑子さんは名前の通り笑顔も超一級の和服美人。小澤さんのおかげで「ゆかたdeまま遊び」も大成功でした。

虹の架橋

検索

で、インターネットからでもご覧いただけます。

第二七九号は十一月一日(木)発行予定です。

発行予定です。

小耳にはさんだ



話
(文責・靖)
《278》

大間々町の民話

桐生市の清水義男先生が「大間々町の民話」第三巻を発行しました。一巻から合わせて七十六話が収録されています。清水先生のご尽力で大間々の民話が後世に残ることを嬉しく思いました。第三巻に「雑煮のいわれ」という面白い話があります。「むかあしのことだった。塩原の殿様は隣の国の殿様と意見が合わず、とうとう合戦をおつ始めちゃった」と上州弁の語り口で綴られています。戦いが予想外に長引く中、敵軍は「虎」と

いう猛獣を出して塩原軍を威嚇しはじめます。それに対して塩原の殿様は「敵が虎なら、わが軍は象を戦場に連れていって、その餅で象のハリボテを作らせて戦場に送り込む」と、塩原の軍勢は「オーッ、わが軍に、あんなにでっけえ象がおったのか。もう虎なんか怖くはないぞ」と勢いを盛り返します。合戦はさらに長引き、兵糧が底をつき始めた時、塩原の殿様は「象のハリボテの体の中の餅をえぐりとれ」と命じます。塩原軍はそ

の餅を煮て空腹を満たしました。長い合戦は和睦という形で終結し、ようやく家族のもとへ帰ってきた塩原軍の将兵たちは「合戦はつらかったが戦場で食った餅汁はうまかったなあ。わが家でも餅をついて、家族と一緒にあの味を楽しもうぞ」と、正月には餅汁を食べることが塩原領内の慣習になりました。そして「あ」ときの餅汁は象の体の中のおんなじだ。だからこの餅汁は、これから『ぞうに』って呼ぼうじゃねえかい」と言い合って塩原領内に雑煮という新しい食べ物が生まれた、というお話でした。



清水義男・画



完成したキャップアート「椿の木」

ル、横三、六メートルの巨大な作品を完成させました。イベント開催に先立ち、七月一日から八月三十一日まで、お客様にキャップを集めていただきました。集めたキャップはイベントに使用するほか、途上国へのポリオワクチンの寄贈に役立てようということので、当初は三万個を目標にしていたが、八月三十一日までに十六万個以上が集まり、嬉しい誤算となりました。完成したキャップアートは、さくらもーるセンターコートに十二月まで展示する予定です。さくらもーるでは十月六日から八日まで開店二十五周年記念セールを開催。期間中は専門店全店で感謝セールを開催いたします。巨大なキャップアートを見ながらお買い物をお楽しみください。

星野富弘さんの「椿の木」ペットボトルのキャップで再現大間々ショッピングセンターさくらもーるでは、開店二十五周年を記念して、キャップアートイベントを開催しました。ペットボトルのキャップを十三色、一万三千二百個を使って、星野富弘さんの詩画「椿の木」を再現しました。イベントに参加したのは、みどり市立笠懸中学校の美術部や富弘美術館チームなど十五チーム、約六十人。皆で縦四、八メートル

世界一小さな
足利屋
トイレ美術館
今月の絵《278》
大野勝彦さん『必要だから』



熊本県在住の義手の詩画家・大野勝彦さんが描いた二〇一九年のカレンダーができました。大野さんは四十五歳のときに農業機械で両手を切断してしまいましたが持ち前の明るさと精神力で苦難を乗り越えてきました。「風の丘・阿蘇大野勝彦美術館」は二年前の熊本地震でも甚大な被害を受けましたがこの時も大野さんの生き方に共鳴する多くの人達の協力もあり、一年後の四月十四日には再オープンを果たしました。大野さんの生き方と愛が詰まったカレンダーは足利屋でも受付けています。(税込千五百円)

スタッフ全員ゆかた姿でお客様を迎えた。来場者も自前のゆかたやレンタルのゆかたでスタンプラリーを楽しみ、インスタ映えする街並みで写真を撮っていた。フォトコンテストにネット上で応募し、その日のうちに表彰式をするという若い人ならではの企画も面白かった。一年に一度、大間々祇園祭の時だけ登場する人力車を特別に借りてきて展示した。明治時代に造られた人力車は、太流館の白壁と黒堀にピッタリと合っていた。ゆかたの美女とイケメン俵夫姿のスタッフとの記念写真が「一番人気」だった。俵夫をやりたかったが年齢と体型と顔ではじかれた。「ななめ」の位置から指さるくわえて見ていた。



砂時計逆さに戻す敬老日



靖ちゃん日記

九月十六日(日)
心配していた雨も上がり、「ゆかたdeまま遊び」のイベントが大成功だった。縦の関係でも横の関係でもなく、年齢も職業も生活スタイルも違う「ななめ」の位置にいる人たちが集って町を元気にしようという「ななめの会」の主催。スタッフ全員ゆかた姿でお客様を迎えた。来場者も自前のゆかたやレンタルのゆかたでスタンプラリーを楽しみ、インスタ映えする街並みで写真を撮っていた。フォトコンテストにネット上で応募し、その日のうちに表彰式をするという若い人ならではの企画も面白かった。一年に一度、大間々祇園祭の時だけ登場する人力車を特別に借りてきて展示した。明治時代に造られた人力車は、太流館の白壁と黒堀にピッタリと合っていた。ゆかたの美女とイケメン俵夫姿のスタッフとの記念写真が「一番人気」だった。俵夫をやりたかったが年齢と体型と顔ではじかれた。「ななめ」の位置から指さるくわえて見ていた。

やっちゃんの似顔絵提供…ひさかさん